

NUPRI NEWS

Nagano Urban Policy Research Institute

NPO法人
長野都市経営研究所

Vol.53

2016.APL.

発行日/2016年4月8日 (年4回)

NPO法人 長野都市経営研究所

発行/NPO法人 長野都市経営研究所 〒380-0834 長野市大字鶴賀御所町1289-1 丸本ビル2F TEL 026-235-7911 FAX 026-235-6166 http://www.nupri.or.jp E-mail : nupri@nupri.or.jp

NUPRI全体懇談会

数々の施策が地域に浸透してきたNUPRI さらなる発展のためにも会員増強を

平成28年2月16日 午後2時50分〜 長野ホテル犀北館にて開催

去る2月16日、「NUPRI全体懇談会」が役員・会員あわせ60余名の出席により開催されました。

北陸新幹線長野〜金沢間の延伸開業、善光寺御開帳でにぎわった昨春から、間もなく1年。NUPRIの企画や働きかけが確かなかたちとなって、地域の活性化に寄与している手応えを確認し合う一方で、期待通りに進まない景気回復へのいらだちや不安を共有する場面もあり、改めて今後への取り組みや課題を問いつけ合う機会となりました。

この日は、5月の開館を控えた長野市民芸術館へのエールとして、俳優・演出家・劇場運営者としてまともと市民芸術館の芸術監督を務めておられる串田和美氏の講演を開催。一般の聴講者を含む約200名が耳を傾けました。続く懇親会では、ご来賓の樋口副市長、県経営者協会山浦会長のご挨拶、北村副理事長の乾杯に続き地方都市の文化的活性化について、串田氏に盛んに質問が投げかけられたほか、新入会員の紹介なども行われ、なごやかに親睦がはかられました。

【全体懇談会 報告】

全体懇談会は岩野事務局長の司会により進行。各部会・委員会の代表から、昨年度の活動報告ならびに今年度の活動方針について発表が行われました。



理事長あいさつ

■成果を糧によりより多い活動を

市川浩一 理事長

日頃よりNUPRIの活動にご理解とご協力をいただきありがとうございます。

昨年はアベノミクスが期待したほどの成果を挙げることなく、年が明けた今も経済のはっきりとした回復は見込めていない状況です。そうしたなかにあつて、昨年のNUPRIは、北陸新幹線延伸、そして善光寺御開帳という大イベントを機に、新たな事業に取り組み、存在感をアピールいたしました。長野駅の新幹線ホームに流れる「信濃の国」のメ

ロディは、新幹線ご利用の皆さんから大変好評をいただいていると聞いています。これは多くの企業・団体の皆様のご協力で実現しました。この場を借りまして改めて感謝申し上げます。また、善光寺ゆかりのパワースポットを探索し、発信して回遊観光に寄与しようという活動も、県の元気づくり支援金を得て、パンフレット、バナーなどの制作を行い、バスツアーも好評だったようです。そのほか、継続事業の数々も順調な展開を見せています。これもひとえに会員の皆さんの創意と行動の賜物と、深く感謝する次第です。

しかしながら、収支状況の厳しさはいかんともしがたいのが現状です。各活動に助成金を活用するなどの努力はしておりますが、皆様には引き続き前向きな会員増強への取り組みを、なにとぞよろしくお願いたします。

部会活動中間報告・ 2016年方針発表

■観光母都市ながの部会

(1) 総括／観光母都市として

新たな展開へ

部会長／市村次夫・

副部会長／夏目潔・掛谷嘉則



昨年は期の最初に善光寺御開帳があり、善光寺ゆかりのパワースポットに光を当てて周辺観光へ人の動きを誘導する取り組みは、それなりに成功したとみています。後半はNHK大河ドラマ「真田丸」に主眼を置き、「武田式築城術」「丸馬出し」など、これまで埋もれていた真田の新情報を世に出す取り組みを模索していたのですが、テレビ局が立て続けに熱心な特番を組み、予定していた情報ソースがすべて露出してしまおうという結果に、部会の活動は足踏み状態となりました。今後はパワースポット関連の別展開、より幅広いインバウンドにつなげるための地域の機能充実などを施策化し、観光母都市ながのの発信に努めていきます。

(2) 県外客へのアプローチをもっと

門前まち花遊歩

鈴木隆治理事・事務局次長



昨年は善光寺御開帳開催の前日、善光寺表参道で行われるオープニングパレードの先陣を切って、着物姿の女性67名が参加し、華やかに開催されました。

5回目を迎える今年は、5月4日、「善光寺花回廊」に合わせて開催を予定しています。県外からの参加者をより積極的に誘致すべく、信濃毎日新聞の井上文化部長や、ISHII KAWA 地域文化企画室の石川利江代表からアドバイスをいただき、銀座の着物イベントでのアピールなどを視野に入れたチラシを制作中です。また、須坂クラシック美術館の催事とのタイアップも計画中です。県内外に広く知られる滞在型のイベントにすべくがんばっていますので、皆さんもご支援をよろしくお願いいたします。

(3) バスツアー好評

ついに掘れ！NAGANO調査隊

竜野泰一理事・調査隊長

調査隊は例年、市内を歩いて気づいていな



かった魅力を発掘するのが通例でしたが、5回目を迎えた昨年は、観光母都市ながの部会で作成した善光寺ゆかりのパワースポット探訪コースをベースにしたバスツアーを計画、9月10日に実施しました。参加者を新聞で一般公募したところ定員を大幅に超えるお申し込みをいただき、市民の関心の高さに驚きました。今回は彌榮神社、湯福神社の齋藤宮司さんに案内人をお願いしましたが、興味深いお話をうかがうことができ、参加の皆さんも満足されたようです。アンケートも非常に好評でした。次回も多くの皆さんに興味を持っていただける企画を展開する所存です。

■新産業創出部会

生産者の高齢化への対応が喫緊の課題

部会長／竹内伊吉・副部会長／掛谷嘉則

毎月曜日に、表参道二番館のpromナードで開催している「採れたて野菜市」では、写真、コメントを入れた各生産者の看板を製作し、生産者や産地のPRをするとともに、特徴や意図が明確に伝わるようにしています。

また、NUPRIの顔となった「りんごの木オーナー制度」は、生産者さんの高齢化や





後継者問題の解決に向け、農業法人化への取り組みを具体的に進めており、この春には何らかのご報告ができる見込みです。引き続きご支援をよろしくお願いいたします。

■スポーツ振興活動部会

AC長野パルセイロ支援活動

南長野スタジアムへ足をはこぼう！

部会長／鷲澤 幸一



皆さんご承知の通り、AC長野パルセイロトップチームは今季、再びJ2昇格を目指してJ3で戦うことが決まりました。一方、レディースは「なでしこリーグ」1部で活動することとなり、地域に新たな刺激をもたらす

てくれることが期待されます。まずは、できるだけ多くの皆さんに南長野スタジアムへ足をはこんでいただきたいと思えます。

今年、スタジアムに行ったことのない人や、サッカー自体を見たことのない人でも気軽に観戦できる環境づくりの一環として、パブリックビューイングの機会を持つと、県の助成金を申請中です。放映権の問題など課題はありますが、実現に向けて努力します。

■シティプロモーション活動

具体的事案の実現に向けて

松本 克幸理事



新幹線延伸と善光寺御開帳を前に、新装した長野駅前に「ご縁」の提灯が掲げられ、シティプロモーションの活動自体が一段落した感があります。しかし、NUPRIとして提案した意見は、耳を傾けてもらったものの、実現してはならず課題として残っております。

具体的には「教育」をテーマに、社会、家庭それぞれでの「人づくり」を地域の活性化につなげていくという取り組みです。企業においては社員教育の充実、家庭においては社会体験学習ができる環境を地域全体で創出

していくことに向け、今後も具体的な施策を提案してまいります。

■わいがやサロン

お気軽にご参加ください

部会長／岩野 彰・副部会長／鈴木 隆治



毎回、大変有意義なサロンが展開されておりますが、いつも顔ぶれが同じという状況が続く、残念に感じております。会員の皆さんにも、またお仲間をお誘い合わせ、ぜひお気軽にご参加いただきたいと思います。

4月には、NHK大河ドラマ「真田丸」の屋敷プロデューサーをお呼びする予定です。「真田丸」といえば、この機会を生かした松代の活性化も、NUPRIの重要な課題です。スマホで目的地などの情報を得る「松代ナビ」がリニューアルしました。会員のピー・クスさんが制作したと聞いております。ぜひみんなで活用し、松代の宣伝に努めましょう。



NUPRI 講演会

地方から文化を創造する

長野市芸術館開館に寄せて

講師 串田 和美氏



講演会是一般公開で行われ、NUPRI会員のほか約200名の人々が集まりました。NUPRIの活動を伝えるビデオ最新版の上映に続き、串田和美氏が登壇。俳優、劇団主宰、ホールの芸術監督として活躍する氏の興味深いお話に、皆が熱心に聞き入りました。

■演劇が市民権を得た時代

僕が最初に劇団を作ったのは1966年、東京オリンピックの2年後、24歳の時でした。大学の演劇学科で学ぶ演劇が自分の思っているものとは違うと感じて中退し、俳優座付属の俳優養成所に3年間学びました。そこで出会った吉田日出子、佐藤信、斉藤憐などと劇団「自由劇場」を作りました。といっても、当時は養成所卒業と同時に仲間と劇団を作るなんて無謀な話で、僕と吉田は文学座に入り、他の仲間もいろんな劇団に散っていきましました。文学座には素晴らしい先輩俳優たちがいましたが、そういうお芝居とはまた違う、自分たちの心が求める芝居があるはずだという思いが募って劇団を作ったのです。

今、東京では若い人達が次々と新しい劇場、劇団を作っていますが、そういう思いとはちよつと違っている気がします。今は、どうやって早く大きい劇場で演出ができるようになるか、集客できるようになるかを考え、先輩たちを手本にしながら世に出る方法を探るような傾向があると感じます。演劇自体も社会的な地位を持ち、小さな劇団も、その俳優も、最初から社会の一員として認められる時代になっています。僕たちが演劇を始めた50年前、演劇そのものが理解されない、俳優なんて特殊過ぎて社会の一員とは認識されないという時代とは隔世の感があります。

僕は劇団を作ると同時に、アンダーグラウンドという小さな小さな劇場を作りました。定員80人の空間に100人くらい入っちゃったり、劇中の仕掛けで息苦しくなったりするような公演をしたものです。あの頃から見れば、なんてよい時代になったのか。でも、何か忘れていているという思いもある。「もっと新しいことをしよう」「先輩たちの芝居とはまた違う、自分たちの、この時代の演劇を作ろう」と情熱を燃やしていた、あの感じとは違うんですね。

これは演劇に限らず文化そのものの、人間の生活そのもの全部かもしれません。当時は携帯電話もないし、パソコンも、もちろんない。芝居を見て興奮したり感動したりしても、「よかったよ。お前も観てみるよ」と、それだけ伝えるために、公衆電話に並んだり、家まで押しかけたり、大変な努力と情熱が要ったんです。だからその行為だけで、興奮や感動が相手に伝わった。観客もそのくらい情熱を持ってお芝居を観、それを人に伝えたいんですね。最近では、メールやツイッターなどで簡単に伝わりますが、宣伝なのか本当の感想なのか分からないものも多い。いい言葉を使えば使うほど宣伝のような気がしてしまふ。一人の人間の感動が、なかなか伝わらないんです。

■地方都市への目線

アンダーグラウンドでお芝居やっていた時代には、きつと一生、この小さな小さな地

【くしだ かずよし 串田 和美氏 プロフィール】

1942年、東京生まれ。1966年、吉田日出子らとともに劇団「自由劇場」を結成（後のオンシアター自由劇場）。『上海バンスキング』など数々の作品で人気を集める。1985～96年、東京渋谷Bunkamuraシアターコクーン初代芸術監督を務める。2003年4月、まつもと市民芸術館館長兼芸術監督に就任（8年から芸術監督）。まつもと市民芸術館での主な作品に『コーカサスの白墨の輪』『グリム・グリム・グリム』『空中キャバレー』『K.ファウスト』、串田和美+白井晃プロジェクト『ヒステリア』『ジャックとその主人』など。

下の公演で、わずかなお客さんに感動してもらうことだけを自分の喜びに生きていくんだらうと、ずっと思っていました。

そのうち世の中の景気がよくなり、保険会社などの企業が余ったお金でホールを造った。演劇をやる人がそこを借りて、お金を払っ

てお芝居したんです。やがて紀伊國屋という本屋さんが「紀伊國屋ホール」というのを造り、大小の劇団に開放した。これは大変なできごとでした。その後、小規模な劇場が少しずつ増えたり、新聞社がホールを造るようになったりしました。

でも、実際に文化を支えていたのは演ずる人々。一番貧乏な人たちで、必死にアルバイトをしてお金を作ってお芝居をする。赤字が出れば、またみんな働いて、赤字を埋めながら次のお芝居を考える。現場の貧しい連中の情熱だけで、日本の多くの文化というものが支えられていたのです。

それがあるときから企業が「利益の還元」として、美術館や劇場を造って運営するようになった。やがて1998年に「新国立劇場」ができました。やっと国がお金を出して劇場を造り、運営をする時代を迎えたわけです。最近では東京オリンピックで文化・芸術をアピールするために、国が積極的に動くようになっていきます。

地方都市でも規模の大きな「文化会館」が造られるようになりました。でも、僕自身は東京で生まれて東京でずっと演劇をやってきたので、地方都市ということに対してあまり関心がなかったんです。2003年に松本市から「単に建物を造るのではなくて、文化のつくり手や芸術家というものを呼んで運営していきたい」というお話が僕のところに来て、ああ、そういう時代になったんだと感じたものです。でも悩みました。

小さな小さな劇場のあと、僕は銀座の「博品館劇場」という企業の劇場に初めて呼ばれました。「上海パンスキング」というヒットしたお芝居をやってくれないかと言われたんです。そのとき僕はちよつと悩みました。その後、また何年かして「東急Bunkamura」という文化の殿堂みたい

なものを造る際に、その中の「シアタークーン」の芸術監督を依頼されました。そのときも生真面目に迷いました。

劇団を作った時もそうですが、前例がないから、やったらどうなるかわからない。大失敗すると路頭に迷います。博品館に出るのも、東急Bunkamuraっていう大企業と組むのも、大失敗をするんじゃないか、自分がやりたい演劇とはずいぶん違っちゃうんじゃないか、いつも悩みながら引き受けてきました。結果的に、たくさんのお客さんが来て、企業が億単位のお金を出してくれて、いろんな挑戦もできるようなになりました。演劇が商業として成立するところが証明されたわけです。今も年に1本くらいは「シアタークーン」でお芝居を作っていますし、そこで立ち上げた「クーン歌舞伎」も続けています。

でも大赤字にするわけにいかないから、演劇がとて商業的なものになってきたんです。冒険も条件付き。前もってお客さんが入るとわかるものでないといけない。話題の俳優やタレントを使うとか、お芝居したことのない人でもテレビで活躍している人なら主役にするとか安全圏を考える。そうすると作品の仕上がりも想像もできない、稽古に入ってもいけない、そんな時点で切符が売り切れるという現象が起こる。それを「栄えていく」という現象だろうか」という不思議な疑問が僕の中で大きくなっていました。

そのときに、国や地方都市が作る演劇ってなんだろうかと考えるようになったんです。世界を見渡すと、演劇は国家や支配者がパトロンとして支えてきたという歴史があります。しかし僕たちは小さな劇場で、自らアルバイトをせずと演劇をしてきた。本当は国や行政がやらなきゃいけないことを、とても貧乏な俳優や演出家たちが支えてきたのだという自負がありました。じゃ

あ、国や地方がお金を出してやるべきことは何か。お金を出しているのは、実は、税金を払っている国民であったり県民であったり市民であったりするわけです。科学の発展こそ人類の進化と評価される時代に、目に見えにくい「文化」に税金を使うのは無駄と考える人も多いかもしれません。しかしこうした時代だからこそ、心の底からの感動を伝えたり共有したりして、人は元気になる。そのきっかけが文化なのではないでしょうか。

ギリシャ時代にはお医者さんは劇場の近くにあつて、劇場でお芝居を観ることを処方したという話も残っています。実際、僕たちがお芝居をやっているときも、代々の店を火事で失い鬱になっていた両親が、芝居を見てすっかり元気を取り戻したなんて話を聞き、本当に驚くことがあるのです。

東京の演劇は価格も高いですね。でも、お金持ちじゃなきゃ病気を治せないなんておかしいといつて保険制度ができたのと同じように、国や行政が一部を負担して、どんな人も見たいものが見られるようにして、それによって地域の人が元気に、心豊かになつて、そしてその地域が栄えていく。地方の「劇場」や「会館」は、そういう場所になるべきだろうと考えたわけです。

同じ頃、まだ元気だった緒方拳さんと2人で「ゴドーを待ちながら」というお芝居で北海道の小さな倉を回るなど、いろんな試みをしたことがあります。スタンディングオベーションなんて知らない地元のおばあちゃんや、喜んで立つちやつてワーツになっている姿に、これは本当に生きているお芝居だと感じた。お客さんが舞台と向き合い、真剣に喜んだり、考えたり、感動してくれたりする環境が地方にはあることに驚き、感心したのでした。

松本市から呼ばれたのは、ちよつとそんな時期でした。初めて行った日は雪で、建設中

のコンクリートの塊は雪の中の軍艦みたいに見えました。うわあ、こんなところで僕にはできないやと思ったりしながらも、間違いないく面白そうだなと感じていた。それで思い切つて引き受けることにしたんです。

■本気で向き合い、心を通わせた結果

その建設に反対運動が起きていることを、後から聞きました。先に教えてよつて感じているわけじゃなく、自分たちに見合うものを造ろうつていう意見、本当にそれを運営できるんだらうかという疑問、あるいは3期続いている市長さんへの反対とか、いろんな声があることがわかったんです。





すぐ辞める選択肢もあったんですが、僕はその人たちと膝を突き合わせて話してみようと思いました。

何度も話し合いを重ねるうち、反対派の人たちが推した今の菅谷市長さんが市長に当選したんです。竣工式の寸前でした。これで終わりだなど思ったのですが、あの建物は国のお金など集めて140数億っていう建設費用をかけて造ったもので、話はそう単純ではなかったのです。市民の思いで百何十億もかけて建てたあと、またすぐに市民の思いとして何十億もかけて壊すというのも、長い歴史からみたらすごいことかもしれない。ひとつの事件として記憶に残りますよね、なんて話を新市長としたところ、いや壊しませんと。続けるならちゃんとしてやりましょうよってことで、菅谷さんとも、また反対派だった人たちとも心が通じ合い、文化や福祉について熱く語り合える関係になりました。

そうして実現したものの一つが大歌舞伎です。東京の「シアターコクーン」で中村勘三郎さんと作ってきた「コクーン歌舞伎」を松本でもやろうとしたのです。1万数千人も来ないと成立しない企画でしたから、市民もびっくりしていろんな意見が出ました。大勢は「無理」という結論。でも「1回く

らいはやってみようよ」という人が集まって助けてくれたんです。

演目は「夏祭浪速鑑」、祭りの群衆が舞台に躍り出てくる場面があります。東京では歌舞伎俳優やお弟子さんたちが30人くらいでわっと踊るんですが、松本では100人出さず、市民の皆さんが1カ月くらい踊りの稽古をやってくれたんですね。そこへ勘三郎さんも来て「みんな、ありがとう、ありがとう」って言ってきて。みんな感動しちゃうし、本当に市民が一体となって大成功したんです。無理だと言った人も、終わった途端に「次いつですか」という具合で隔年で4回やり、ボランティアの方々も300人も集まる、そんなお芝居になりました。

信州・まつもと大歌舞伎は、一緒に作る喜びを感じる人たちによって支えられています。迷惑をかけないようにやってたら、なかなか思いつかないし、できないことでした。僕は反対運動をひっくり返す議論もしたし、あるときは怒鳴られたり、こっちは言い返したりしたことあります。駄目ならいつでも帰る覚悟をしていたし、市議会ですら怒鳴り返したこともありました。そのくらいお互いが本気だったんです。その結果、串田がまたわけのわからない難しいこと言い出したよ、やるしかないだろ、みたいな人たちがたくさんいてくれて、そのうえ市民だけでなく遠方の人たちも手伝いたいって来てくれるようになった。さらに、東京で演劇やっている俳優や演出家の間でも、松本でやっているのはなんだか違うぞって評判になった。夢中になって必死で観て、ものすごい拍手して、わかんないときはわかんないって言う、そんな観客に俳優たちが感動し、東京でそれを発信する。勘三郎さんは勘三郎さんで、夜はすぐ街に出ていろいろなところで飲んだり食べたりわいわ

い市民と語らう。僕が何かしたってことじゃないんです。反対運動からスタートし、誰もが本気で真剣に意見を交わし、真剣に関わることで、渦みたいなものが生まれたのだと思います。

■工夫によって長野スタイルの新たな文化を

「長野市芸術館」は長野市民が税金で、市民の了承のもと、市民のために造る劇場です。皆さんがその恩恵を受けるために存在するのです。それをどう支えるかは、皆さんの情熱と工夫によると思います。芸術監督の久石譲さんには彼のスタイルがあると、思うし、長野市は長野市の新しいスタイルを見つけていくのでしよう。

先ほど、建築中の建物を見学してきました。ものすごくきれいですね。ここに新しい文化が生まれるんだろうな、松本との面白い交流ができたらいいなと思いつきながら見てきました。ある人によると、長野県は合衆国みたいで、山一つ越えろとみんな違う風土と気質を持っているそうですね。やっかいなようだけど、逆に面白いじゃないですか。気質の違う人たちが出会い、驚き合ったり、感心し合ったり、どうやって仲良くできるだろうと方法を見つけようとしたりするの、実に面白い。そういう交流が生まれる第一歩になったらいいな、なんてつくづく思いました。

僕はほんとに小さな不便な劇場で長いことお芝居を作ってきました。天井が低くて背の高い装置はすぐつかえちゃう、照明機械をぶらさげると頭にぶつかると、走って退場しようとする壁。それをプラスに転ずるには工夫しかなかった。先輩も師匠もいないなか、全部自分で開発してきました。でもその不便極まりない小さな空間が

僕の先生であり、師匠であり、先輩だったと今でも思っています。工夫する、辛抱する、なんとかするっていう思いを僕の中に植え付けてくれました。

立派なまつもと市民芸術館でさえ、このお芝居にはちよっと変だとか、広すぎるとか、逆にぜいたくな悩みが起きるものですね。どんなに便利な最先端の機能を持った劇場でも、やっぱり工夫は必要なんです。

もうすぐオープンする長野市の芸術館も、入ってみれば「もつとここは」と感じるものが絶対あるでしょう。そこに皆さんの思いをそそぎ込み、詰め込んで、プラスに転化した時に、長野市独特の文化が生まれるのだと思います。建物だけじゃなく、それを支えている長野の人たちって「何かいいんだよね」「何か温かいんだよね」と言われるようなものになっていくんじゃないでしょうか。そうだった長野と松本の文化交流を、心から楽しみにしています。

